改正月令博物筌　春部　一二

十二月部目録

△印ハ俳諧の季なり　○印ハ季にあらず

十月

卦　陰陽生　異名　和名並註　律呂

△小寒　三候　△大寒　三候　詩歌廿二首

△土牛童子の像を立る

日令

日		
三日	△乙子餅　川浸	四十
三日	△御國忌	四十
八日	△臘八　臘八粥　酒糟粥	四十
十一日	月次祭	五十
十三日	△事始	五十
十五日	△霰勝寺灌頂	六十
十九日	△御佛名	六十
北二日	△柏梨勸盃	七十
北晦日	△小晦日	八十
卯日	△乙子朝日	四十
巳日	△忌日御飯	四十
巳日	△臘日	四十
十日	△御體御ト奏	四十
巳日	神今食	五十
巳日	△荷前使	五十
中午	△御髮上	六十
北二日	△被綿	七十
北二日	△大德寺開山忌	七十
晦日	魂祭　蠶の蔟	八十

生身魂　八丁
△豊前帯川神事　八丁
△御贖物　八丁
△米洗　八丁
△門松營　十丁
△年守　十丁
△大節季　十丁
△分歳　十丁
△節分　十丁
△厄塚建　十丁
△寶船　十丁
△厄拂　十丁
△厄拂　十丁
△鬼頭拂　十丁
△歳暮　十丁
△年忘　十丁
△寒垢離　十丁
△嘉祀　十丁
△年内養　十丁
△歳暮　十丁
△年の名殘　十丁
△年の別れ　十丁
△行年　其外詞品々　十丁
△冬梅　十丁
△年木樵　十丁
△年取物　十丁
△星佛賣　十丁
△節季候　十丁
△年の市　十丁
△餅搗　十丁
△餅花　十丁
△寒聲　十丁
△寒念佛　十丁
△寒の入　十丁
△寒の入　十丁
△年仕舞　十丁
△年の名殘　十丁
△春とうろう　十丁
△年ひと　十丁
△行年　其外詞品々　十丁
△歳暮狀　十丁
△大原雜喉寐　十丁
△五條天神詣　十丁
△吉田大祓　十丁
△貘枕　十丁
△柊挿　十丁
△豆打　十丁
△追儺　十丁
△除日　十丁
△大年　十丁
△年籠　十丁
△岡見　十丁
△大祓　十丁
△伊勢齋宮論馬掛　十丁
△衣配　十丁
△古暦　十丁
△節季候　十丁
△年木　十丁
△年の市　十丁
△餅搗　十丁
△寒聲　十丁
△寒念佛　十丁
△歳暮狀　十丁
△煤掃　十丁
△札納　十丁

月令　時令　草木

△早咲梅　△早梅　△寒梅　目録　廿七ノ
△臘梅　廿七ノ
△寒竹子　△孟宗竹　廿七ノ
△探梅　廿七ノ

生類

△八目鰻取　廿七ノ
△寒鯉取　△冬輪田鯉取　廿七ノ
△鵜巣とり　廿七ノ
△雞乳　廿七ノ

必用

此部ハ風雨の占破軍のひ方日どりとり方他行の心得。旅山の心得等をのせ　十二ノ丑八十九九十メ

養生

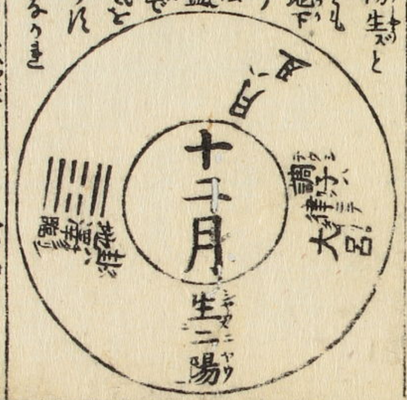
屠蘇の方　廿七ノ

飲食

△煮凝　廿七ノ
△凝豆腐　△豆腐　廿七ノ
△鯛味噌　廿七ノ
△寒曝　廿七ノ
△寒の餅　廿七ノ
△寒造酒　廿七ノ
△菜飯　廿七ノ
△鹿賣　廿七ノ
料理献立　終

十二月の部

△印ハ俳の季れ用ひ来る物ゝ



調ヘハ大呂ハ陽氣出んと欲して陰これをゆるさゞるゝ　白虎通

○卦ハ地澤臨ハ水澤腹堅ゆゝ意ゝて陰さかんに閉て陽氣泄る所ふたゝび氣が和せざるゝ地澤ふ臨んぐ水をとゝしむる意之月令に出ず

十二月異名

△臘月　唐書○嘉平月　史記○季冬　礼記○涂月　雨雅○窮節　顔延之詩○急景　白氏文集△般正　纂要△暮冬　緒清△杪冬　唐詩△二陽月　事物異名

和名　三冬月　藏王　春待月　同　梅初月　同
名　さとしのつき月　秘藏　年つき月

くれこ月　莫傳　おやこ月　同　師走

かぐらの月　乙月　新月　此月

異名和名註

臘月とハ此月獵さして先祖を祭る也臘月といふ獵の譯ハ北丁目ニ出○嘉平月ハ秦の始皇臘の名をかえて嘉平といふ

○季冬ハとゑの冬ととらの義○涂月ハ爾雅ニ十二月を涂ともいふ

○急景ハ氣色の短くせハしきなり

○窮節ハ節のきハまりつくるといふ

○殷正ハ殷の代の正月ふたつの月○杪冬ハ杪ハこずゑとゑとらの字なれ冬乃末とゑとらなり○二陽月ハ二陽生ずる月とゑとらの支ゑ乙月の譯ハ朔日の所ニ見るべし○さはすとゑハ四時のとゑる月なきハさはすとゑをすつ通音なれば又

師走○師と僧ニ此月ハ古へ僧を迎て佛名を唱ふ今の棚経ニ同ド僧の走りわざ

月名はかくいつり奥儀抄○真淵の説ニ年極とかきてとしと訓る月とゑ事といふ

哥　藏王　春待月

ふるとしの年ハ過ぬとまちつる春待月をいそのーきうる

同　梅初月

ハやきつほむ枝うとほのゝえて梅ち月のこころいろ色

秘藏　年よつむ月

月の上ニ年よつむ月いくかさね　業平
ちぎりてもみ雪ぬきいりきぬ

師走

行とかく走ぬの空ふゆふくり
ぬれぬるゝ月のほのくれ　業平

莫傳　暮古月

このくれぬ今やけくらんふかく
くれこの月乃こころに知て　定家

藏王　三冬月

ふるる附ると尽えく三冬月
いそのふつる空のぎ宋さ

莫傳　おやこ月

わるき人のこたなむはつる歌ゑ月
わやいのちのためーなるーん

(俳)公ある師走や阜ふ枝密柿　鶴谷

七徒の仲るに頃る師走ふ　冠里

丑走も狀くかーけて師走ふ　石良

後夜を走ゑ月のおもゑーん　隱乙

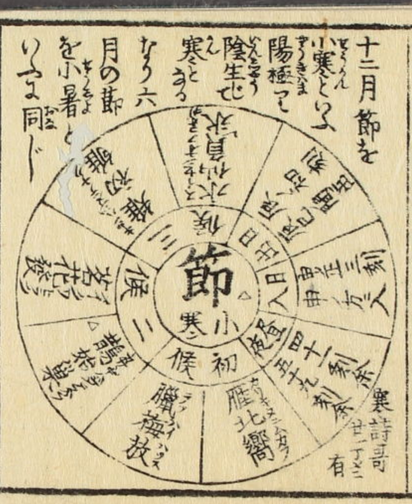
扇わくーなる師走れ巨燈うれ　積雨

(狂)正月の樂盃うさんるもひくーふぞ

寸るも師走の打ゑう菊ゑう　家藏

小寒

節の名○七十二候○草木七十二候○昼夜長短○見出等左ふ記ス



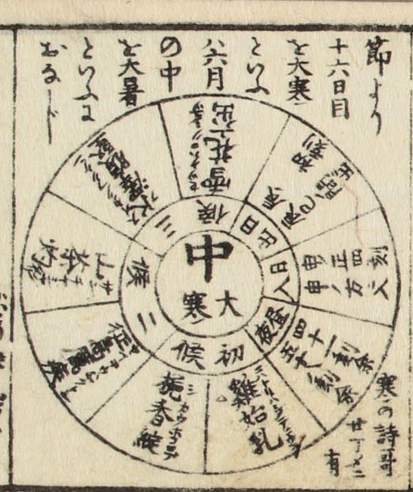
十二月節を小寒という陽極て陰生じ寒まる

なり六月の節を小暑とりて同じ

○雁北鄉ハ陽ニ順ふて北ニ歸ゑうこと月令の註ふ有り○臘梅放ハ此頃咲ゑう臘梅の譯ハ廿八丁小委ー○鵲始巢ハ鵲ハ木を匝て鳴ふと詩ニも多く作り侍るゆゑう此頃の陽氣ふゑうて始て巢を定ゑ○花發ハ茗花ハ茶の花ニ○雉始雊ハ月令の註ふ雉火畜ゑうゆ陽氣に感ゑて聲を出ス事有り○水負氷ハ水仙の花水に負ゑーう立のびる事ゑう

大寒

中の名○七十二候○草木七十二候○昼夜長短○日の出入等左ふ記ス



節より十六日目を大寒とりて六月の中を大暑とりーユるード

○雞始乳ハ六月令の註ふ雞ハ木ニ屬ゑる畜類ゑれバ陽氣ニつきーく後の形ゑと

いつ事ことうり乳の字をつるひとよませたれば陽氣に催されてつるむ事をいふなり

○梔香綻とハくちなしの花のひらく事なり

○征鳥厲疾とハ鷹鳥のこげーくなることゝ

○山茶灼とハつゞたの咲ふとうり。水澤腹堅とハ水のあゝ澤の氷が上下ともに張つめる事ゝ。雪花六出とハ雪の花ハ六ひらなるのゆへ雪のちきうに降る事なり

大寒　天氣　東風吹バ晴天ゝ冬の土用寒ゝ　来年六月ひでり

大寒　日　土牛童子九像を立。文武天皇の三年十二月ゟ天下疫癘ゟく死とる者多くしバ禁中ゟて土の牛をつくり僕ゟくはらひをさせるつゝ唐土ゟも土牛九像をつくりて郡々の郡縣ゟたてゝ寒氣をはらゝすゞ為ひとゝとる事なり

日令

此部ハ十二月一ケ月の日定なる事支の定とゝる事をまるれ

朔日　乙子朔日。物の始を甲といひ末を乙といふ故終りの月の朔日をれバ乙子といふなり

（俳）月のつゝちゝ多くれもおほ　凡東

乙子餅。弟子餅とも書く

○今日餅を喰ふ六年の間無事にくらゝ　今日朝日の終りとなるをバ元日ゟ餅をいてゝふ

ふゝ〜ひく今日もゝ

○又一説ゝ今日れいとゝいハ唐土ゟ臘日の祭の餘風ゝも

（俳）乙子豚ゝ　宗目

川浸。川ゝ浸り解。今日の餅ゝ喰ふ時ハ水難をのがゝ江戸ゝ東ゝらいへも今日ゝ川ゝ浸りとゝを深き譯ゝ事ゝ委しく記る臘の祭論著

朔日　忌日御飯　季ハ六月　三丁ゟ委く記ル

二日　○今日沐浴ゝ　○京太秦佛名會今日ゝ

三日　**御國忌**　今日八天智天皇御忌日なり。近江国崇福寺ハ昔ハ志賀寺とも寺ともいふ詠ー〜雲御抄

中世三井寺に移ー〜るゆへ今ハ舊跡のみのこまり天智天皇ハ聖天子よく中興のあるゆへ此君の事なり

御国忌といへバ此君の事なり

上卯日　大和　○大神祭。卯辰の両日なり季ハ四月と代四ノ六丁メふ妻ー

子日　今日延又ハ畳の表を日にさゝせバ蚤虱を去る事妙なり

六日　不成就日　七日　此日遠く行至らしゝ必ゆく所ふ達せず

辰日　**臘日**　委しき譯ハ廿三丁ふ有　**臘八**　唐土ふて今ハ

八日　**溫糟粥**　△臘八粥。釈尊今日曉の明星を見て道成ー

の日之故ふ本朝ふも京都天龍寺相国寺東福寺建仁寺萬壽寺右

五山ふて粥を製ることゝ所謂の粥八昆布串柿大豆粉藥菓と合成。唐土ふも此日寺々ふくいろくの加藥を入て粥を煮て食ふ又檀家へ饋る之是を臘八粥とい。○道成乃ゝけ委しく博物筌シの部ふ出ス

八日　今日竈の神を祭れバ大ふ幸ひあり祭神委ー〜ハ歳時記ふ出ス

○唐土后陰子方という人臘乃日朝早く起く米炊きゝれバかゝどの神ゝハまてく見へゝゝ子方是を拜ー〜く辛ひを受く家ふ黄金羊ゝしを以く祀ることなれバふゝゝく大富を得ることゝ

八日　京都　○智積院ふ論義ふ付くのち一山酒宴をなん

八日　**妙藥**　○今日の水を貯へ明年病ゝる人飲ハ能く万病を治ス。此水ゝく丸藥ふ製る方ゝる時ハ大ふ妙なり。○今日

の水ゝ燈心を浸して明年火を
九月　ゼバ蛾皆去る慶義ゝ出ゝ

十日　御體御ト奏　季ハ六月

十一日　月次祭　季ハ六月

十一日　神今食　季ハ六月

○右御體御ト。月次祭。神今食ハ朝庭ゝ公事
ゝて六月十二月両度行ハるゝ行ゝ国ゝ
六月の條ゝ記ゝ侍る尚委ゝハ補遺ゝ出

十二日　山城

○南禪寺大明国師忌日
○妙心寺開山忌。博物筌ゝ委し

十三日　事始

○正月。事始。今日内裏に
大臣以下正月の行司を
定む又天皇元日の御装束等を辨
備る。民家ゝも今日ゝり正月の
入用の品ゝ〻〻〻の用意をなすと
煤拂おゝく〻今日ゝるなり

(俳)はゝゝも〻慶賀る事始　鷺水
事始ゝもゝ〻〻〻ゝ人ゝ死　杉風

(狂)のどゝる正月ゝのけゝわれゝ
せめゝ〻れの解をゝもせよ　政長

十三日　荷前使

○昔十陵ゝ墓を定め
られ其所ゝ勅使幣を
奉ゝひゝるゝゝ荷前ゝ初穂ゝを
よゝて神ゝ奉ゝるゝゝ義ゝ十陵と
ゝゝ〻ゝ御代々天子の陵十ヶ所。ゝ墓を
ゝゝ〻ゝ親王大臣方の墓ゝ所ゝり此
事ゝ崇神天皇ゝり起ゝ〻ゝ四
季物語ゝ出ゝり尤勅使ゝ吉日ゝ
撰ゝるゝゝも今日ゝ定ゝるゝゝ
(俳)内殿ゝ竈ゝて行紀十陵使　野史

十四日　不成就日

○今日ゝり十六日まゝ
泉涌寺佛名會

十五日　無病

○今日沐浴ゝ身ゝ清ゝれバ
ゝて諸ゝの災ゝ〻ゝぬゝる

十五日　寂勝寺灌頂

今ゝ〻ゝ舊跡
ゝ岡崎ゝゝり

灌頂の事ゝ〻ゝ〻ゝ俗佛事篇
ゝゝる書ゝゝゝ面白ゝ〻ゝ

中午日　御髮上

○蔵人御髮の梳ゝ
髮を賜ゝ主殿宣

人松脂を献じて焼く之上臈ハぬけたる髪を箱に入置此日やきて灰に沈香を和し器に入まきよき地にうつむ○一説下午といふ

十九日

御佛名

○名だいめん○雲の上人名乗をすることをいふ○僧を請じて三世の諸佛の御名を唱ふるなり三世の佛の御名をとなふれバ作れる罪を雪とともに消るなどと哥にも詠り
○禁裏にて十九日より廿一日まで行はるゝ仁寿殿の御本尊を移して御帳の内にかけ佛前に香花庇に地獄の画の御屏風をたて男女とも佛名を唱ふ○名だいめんといふ事ハ佛名終て殿上人各名を名乗をいふ

(哥)三世の佛の御名をとなふるしるしにつミもやこよひのきえうするらん 俊頼

千首 五戒のかたくまでにとなへても佛の御名や杼のいるらん 師兼

(俳)風防くたミハ地獄も屏風かな 曽風

(俳)佛名やまた宗貞の噂もさそて 疎松

(狂)地獄の絵みてねぢくさ佛名もやさぬるとの様にハみへけし 来中

十九日

被綿

○佛名の導師の僧に賜之蔵人とりて僧は肩にかくる也

(哥)堀川次郎百首
かづけたるわたやきうけよ氷におきさけくひとへにつゝみせなかにかくして 俊頼

(俳)寒風に切てまくる首へかつけ綿 桂嵒

十九日

柏梨勸盃

いにしへ摂州なり柏梨といふ地より左近衛府によせきたりより此官府に其柏梨の地の利分を以て酒を造るおもしく佛名の夜に飲宴をなされをかやうの勧盃とハいふなり

廿日 山城

○嵯峨釈迦堂をはじめ本尊開帳あり

廿一日

○今日病人を見舞ふ事をいまはしむる之○猿ハ川端へ行こととなれ

廿二日　不成就日　○今日房事をつくしゝば三年の壽を延ぶしいつと

廿二日　山城　大德寺開山忌　今宮北南紫野おゆり開山

を大燈国師といゝ延元二年十二月廿二日寂

(俳)茶人皆ゆうゆうけの大徳忌　秀井

廿三日　○一遍上人の忌日〻時宗の寺ふを不殘法事ゆう博物筌ふ委〻

廿四日　照虛耗　○今日塚のかとりに灯を照せ食を供ぜば富貴幸

廿四日　灶神送　○今清の世ふ今日灶神天へ上つるゆう一日ゆう〻〻家々灶神の札に供物をそ〻〻禮拜し神を送ると云て其札を燒すてゝとそ又正月元朝ふ神を迎ふゝて新ふ灶神の札を張りく物を備へ祭る

廿四日　占候　今日米の飯を碗に盛くかまどふ供まゝば家内安全ゆうさて来年の事をうらなふふそうの供へる飯をうちわけて見るに碗ようるほひあまゝば来年はほゞよ雨ゆうくさりにあらど雫のなるふどぬまてあるを来年大水出ゆうとれりひ乃外碗の底かを泥くゆうゝき来年大ひでりなるゆう

廿八日　○鉢叩結願。極樂寺の本堂にて踊念佛ゆう。結願とゆうと云事〻

廿九日　小晦日　明日を大晦日といゝ今日をかくいつ

晦日　魂祭　今日なき人の来る夜とてなま祭をなす　報恩經ニ出

昔ハ今日も色〻ゆう七月の條ふ委田舍ふハ所ようゆう今も祭る〻俳ふハ暮の魂祭とゆう又ハ文ふ景物結びく季〻ハ

(俳)魂ぬかとなへさ抱ハ歩う邪　立雨

(哥)夫木　ゐ人の事ぬかゝ君を家をむ宮ゐ出ゐなの里　智泉式部

生身魂　両親又ハ親族の存生乃人を別棚をこつらひ祭る

田舍ゑハ其風儀今ものこれアヒ月の條ゑ委〻俳ゑハ〻の景物と結びく季ことゝろゝ

(俳)こてもゝゝ巨燵て寒れ雪乃遠　乙州

晦日　京○祇園神前大般若經轉讀
都　同子刻ようけづくかけ神事ゝゝ

晦日　豐前　和布刈神事　今夜丑の刻　社人帶劍ゆて鎌を持松明をゝけ海底ゑ入ることゝ潮水左右ゑ開き干ゝ後ゝかびひ和布を一鎌刈取ゝ元日神前ゑ供ゝとゝゑ社ハ豐前金救郡集部村ふゝゝ故ゑ早靴の社ゝゝ昔此所長門国ゑ属ハ神功皇后の時ゝゝ豐前の国ゑ属ハ

(俳)踏抜さふとんの下や和布刈の夜　荷雪

ゝろゝと釈ハ和布刈の扶の事　衛守

(狂)和布をかりて神へとゝるゝみたゝ　雪峯
ゝゝゝく者ゝゝゝ味ゝろゝふのふ

晦日　伊勢　齋宮繪馬掛　伊勢齋宮村の森ふ祠ゝゝ

今小さゝ繪馬を掛ゝ其繪ハ縱と砂金袋の繪と書何ともゝゝすかけおくゝ昔此所ゑ齋宮ゝゝ其時ハ今日大祓ゝゝて繪馬を奉ゝ齋宮の儀式絶ゝ其例ゝゝ繪馬を掛る事ゝゝゝ又今夜繪馬を掛る事行疫神を宥むるゝゝゝゝゝ増山井ゝ出ゝ

(俳)社ゝの畫ゝ義宗掛ゝる蓑　柳水

御贖物　公事根元ゑ六月ふ同し
とゝゝ出ゝ乃

部ハ卅日ゑゝゝ註ゑハ四れかゝ
けを指ゝゝ上ふゝゝる紙ふ穴
をあけ御いき法入ゝゝ弘仁五年六
月ゝゝ御藥の事ゑゝゝはゝめて
御贖物奉ゝ大ゝゝハ素盞嗚尊の
千坐置戸の祓なゝゝゝゝ起ゝ
ぬゝ事ゝゝ。按ゝゝに根源の
説おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
を贖ふ。かのゝゝひの義ゝ天子乃

息を入らるゝハ御罪をきらひして卅日の秡よりハせの一御ふる代の心をおもひ　かゝ屋ゝとうれば両月とも卅日はゝひの御ゑん

なるべし

(俳)一息のれ後拾やゝ代の春　荷風

卅日　**大祓**　(俳)夏祓はゝひ　けハ六月の條ゝ妻ゝ　素能

米洗　卅日ふかぎゝ餅米を洗ふもの一説ゝ元日ふハ心長閑ふ樂んが為米をゝ卅日ふ洗ひ貯へ置ともの一

(俳)米ゆゝしわとて洗ふ　管月

卅日　**岡見**　今夜子の刻高き所ふの尾ゝ東の方を見て朦々と霧の姿きハ明年四ゝ又明らかなる時を明年吉ゝ又今夜高き岡ゝ登て蓑ゝ逆さまに着て過ゝ我家をゝれば明年あるべき吉凶見へゝと温故日録ゝ出

(哥)ゆとゝ中れおほつゝかるさて是夏ゝ　俊頼

(俳)野田国義ゝ洗ふる蓑ゝ　夏井

ゝ打竹の世ゝ生ゝ人ゝ　可水

卅日　**門松営**　門松立ゝ(俳)門松ゝ是ゝとゝやゝけおゝう　梅指

(哥)夫木　山ゝ門の外ものゝ松ゝ立ゝ年ゝ成ゝ　堀川

堀百　門松ゝ立ゝ　顕季

年笹龍　伊勢大神宮ふ此夜ゝ

ゝ一説ゝ伊勢大神宮へこもるばゝ

(哥)夫木　老らくのかゝまんゝ年のゝ　信實

此哥の心ゝて卅日守歳と同一意ゝ

(俳)年ゝ　苦帆

卅日　**年守**　守歳ゝ今夜い祝だして春をむかゝるゝ東ゝ

卅日　**大年**　大晦日ゝ年のゝて也ゝ大の字ゝとゝ書ゝ

廿日 **大節季** △掛取(俳)掛乞ふ家在 ん せ ん 梅の花　兎涼

○掛取ハ雑ともつ△○大年　大晦日大祓のこと け 委しく日本歳時記拾遺に出さん此書ハ字義を正し諸書の故事を引き面白く論あり見るべし

廿日 **除日** △除夜△除夕。除ハのごくとよむ字あく今年ごのぞき去ること来年ようるをの一

○除日詩哥左に記す尚歳暮の條見べ

(哥)御集　伏見院

ことよりしもなのくちハのこりけきぬ
たのいとくなる夏ふうめうん

拾遺集　源重之

いさうつるおのうらしとかぜ吹くく
はるとハいふとやうらもつき

(詞)々ふのことを言ひ。ふるとの考ふる。とし
こを行の一夜なるう。ゆとりとにかやらふ
。年ふるにふるる。ねよ年ろ。年のこ年
。年もいぬなり。年ハ一夜

(連)ふるハなとと知ひ々さ〳〵年の暮　紹巴

(俳)除夕へて年女紙人花の夜　支考
ゆ夕の一夜あちこちや花の夢　全
ふり方ら表とふる市大三十日　竹川

大三十日琴にくよ月ぬ打の春ヲ　湖春
うちくと大年の市に夜の春雨　半窓

大廿日やうて底ぬけみなの川　連孤
二ゑ〳〵大晦日にてもまい　紅素

(狂)さぶあ江世のゆ夕ふ月ぬ
いうちぶとのふきてヲ除夜　貞左

廿日 **分歳** ○唐土ニハ大年ノ夜先祖
故事 ヲ祭テ家内打ヨリ酒
宴ヲナシ金銀銭ナドヲ家族奴
婢等ニ贈ルヲ云トソ

萬年糧 唐土ニハ廿日ノ夜米洗ヒ籠ニ米ト飯ヲ
盛リテ上ニ松柏ヲサシ。寝柏等ヲ置テ
日ヨリ三日ニテ餉之今蓬莱八此余風ニ

焼燈 此夜院々ニ燈ヲ焼ニト如
臼日トイヘリ

設火山　階帝除夜毎ニ殿前諸院火ヲタクコトシ又山ノゴトシ

コレニ沈香ヲタキテ火光暗時甲煎ヲ以テソヘク香数十里ニ及ブ

一夜ノ間沈香二百余秉ヲ用ユ甲煎ニ百石ニ過タリ　隋書ニ出

醉司命　都人除夜ニ至テ僧ヲ請ヒ看經シ酒菓ヲ備テ神ヲ送ル合家簪ヲ燒テ紙銭ニ代ヘ竈馬ヲカヽドノ上ニハリ酒ノ糟ヲ以テ竈ノ門ヲ塗ルナリ是ヲ醉司命トイフ　事文類聚ニ出

詩　除夜　呉嶼

老稚均欣二載安　オヒタルモワカキモヒトツニコトシ
一年安ラカニ暮シタコトヲヨロコブ　低吟淺酌共盤桓
ハナウタヲウタヒヨイホドニ酒ヲ瓦瓶春ノニヂミすくユルリトシテ井ル
透屠蘇暖ヤキモノヘトクリニハヤ春ノ氣ガトヲツタカシテトソノ酒ニアタヽ
石鼎香銷柏子寒ヨガワケレバ

石ノカナヘニタイタ香ガキエテ寒クナル　無限世紛多軌
掌イロ〳〵ノ世間ノ用事デ　那知天運又更端トキノマハリアハセハシレヌ
ニヽタ一年アラタヘル　迎新送故須臾事アタラシイ春ヲムカヘフルイ
トシヲ送ルモワヅカノ間ノコトジヤ　不倦挑灯坐夜闌タイクツセズニトモシビヲカキタテ夜ノアケルヽデスハツテ井ル

詩　除夜五字對句　同上

夜將寒色去　今宵光景舊
燈向曉光新　來日歲時新
ヨルハサブイケシキヲモツテイヌルヤウナ　ココヒノケシキガモウフルビテ
トモシビモアカツキノヒカリニ向フテ新ウナルヤウナ　アスハトシモヒキモアタラシウナル

詩　除夜七字對句　詩楚

晚景莫追窻外驥　一夜去
コトシノクレノケシキハドノヤウニヒカゲヲオフコトヨスナ　ニヨヒ一夜ニヤイデシフ
春風不染鏡中絲　五更來
アスハルカゼハカヽミニウツルシラガヲソメテモクレヽイケレド　ミヨケニハ春ガクル

節分　追儺　鬼やらひ　なやらふ　追ともいふ　昔八卅日の夜

なり　今ハ節分ニ行ハる。疾鬼と追むらふ。疾鬼とハ邪氣を指ていふ

なり陰邪の氣人を傷ふのゆゑ追ら為の義なり其鬼と名づる者ハ熊の

皮を冠りて鬼の面を着て黑き衣に

赤き裳をつけ斧をもち楯を持て

禁裏の四門ニ立其時陰陽寮祭文

をよみ上卿已下桃の弓蓬の矢をもつて

これを追ひ射る世間問答ニ出さう

○なやらふとハ追事ハ源氏物語ニ出て儺

やらふとハ追事ニやらふと云義なり

（寄）夫木

九重のやまのうへにうやらふ乃

おとよともすふりつくしう邪

前大納言隆季

家集

鬼ともの〳〵も数のうちにこそ

ぬきの〳〵やこよひ人まつ宮〳〵ん

貫之

（俳）鬼やらひ知つてうさすると物ゆ　梅丹

なやらふや迯るハ実ふとてやり　寒林

追儺の祝鬼の女房ハ涙ぐい　孟子

鬼ずひなおの武者の仰合しき　笑姿

（狂）迯やハる鬼の目ゆもにつのめ

めでたくはらふたこてつけきゆ代　信舊

（詩）宮詩　王建

金吾除夜追儺名畫袴朱衣

四隊行金吾ハ鬼やらヒ勤メルモノ　畫名十一モ袴アカキ衣ヲキテ四ナラビニナリテ鬼ヤラヒヲツトムルナリ　院々燒燈如白日沈香火底坐吹笙役所ニハ火ヲタキ燈ヲクハテイザヲフクセラ又禁帝ノオモムキハ一デカナルモノニテ其中ニ樂アリ沉香ヲタクハ隋帝イトキノ故事ナリ

節分

儀式　鬼やらひ

ひいらぎ。宝舟。厄拂の事ハ昔ハ

晦日ニ有ラれども晦日の夜ハ来ら

年のまふけふ事ハ上げきゆ中世ろ

右等の事を節分の夜なとゝ

尚委しくてけハ年中風俗考ふ出

たり面白ク事ニ見ゑべし

豆打　△爆豆△撒豆△福ハ内△鬼ハ外。禁中ニも熬豆ト撒〻〻疫鬼ヲはらハせらるゝ事宇多天皇ノ元ヨリ始る民家ニも豆をうちゝく福ハ内鬼ハ外と雜ことなり豆をうんらのハ来る年の支ヨ當る者つとひ是を年男といふ。又豆を打事ハ魔目ヲ打といふ義ゝ風俗考ニ出

○唐土ニも今夜赤丸と五穀をちく事後漢書の註ニ出さり赤丸とハらつきの事ゝ

俳　うをくる兎ハいとへいらぬ豆　其角

入聟やロの内ての鬼を外　了雨

鬼ハ逢ふさ内の者ゝく鬼ハ外　来山

柊挿　△柊賣。冬も青翠ナして負を守る柊ハ操ノうと本艸時珍の説ニ出

○世俗ニ門戸ふさーて目つこ鼻つことて同ゝく鬼を追ふさ神代巻にひいらきの柊のもとゝはりこの縁ヨよゝるや

鰯挿　△鰯ノ頭さす。井クシサス△なよ〻ノ頭さす。いとしのかゝらハ疾鬼邪鬼のきゝふものゆへ今日さすべゝ。○土佐日記

節分の條ニ曰なよゝのかゝらひいらきを小家の門ニさすとい事あるなゝハ鰯の古名と思る然まども勢州ニくハ鰯乃魚をなよゝとゝひ名詰ともいふ是なゝ事ハ志ゝ波

○井クシ弁スとハ節分の夜鰯の頭を門ニさすをいふ吳竹集ニ出

寄　世の平ハ数ゝ〻ともひいらぎの色ニいとゝもいとゝ為家

俳　その緒の文ふ文ふ言葉　松雅

柊ハ紙さすふ前る柊作の書　也鳳

狂　柊さゝ一豆ておあ〻かれうさ

ひめうトニハいゝまゝ六ゝよ　貞左

貘枕　△貘の札。白澤と云獣乃事ゝと白樂天ハいつり節分

の夜貘の図を畫く抗とされハ
悪夢を見ず諸の邪鬼を避る事
妙之俗ハ貘ハ夢を喰ふ獣といふも
いとれなり依之左ふ貘の正像を出し

○唐白樂天貘屏讃曰
寢其皮辟瘟
圖其形辟邪
今謂之白澤

○五法水ハて寫し　る此神像を家ふ
所持とすれバ時疫や病うつらず狐
狸悪氣其外諸の怪し　紀之の火
をなす事なし　万一怪しき事ハる
う又ハ怪しき病人ハ　ばこ白澤
の像の前ふ　く呪文を唱ふまば
まいげん神の如し　近世ハ大坂吉文
字屋市左衛門といへる本屋ふて五法水
ふく写しなる此白澤の像と賣る。世
間ふハる守札と違ひ渉世錄其外諸書
ふ出く正しき事なり余も此像
を家ふうけて凶事の吉事となり
なる事多し依之諸人の為ふこに記し

(俳)もしもよ紀之ふらいふ貘枕　蓼国

(狂)とてもふう法世の夏を貘ふて
五十年でもいきく一口　湖月

厄拂

〈厄落。節分の夜民家の
門を厄拂ひ　ふまく　この
て乞人ふ通ふる　其者ふ少しれ銭を
与へまバ俗ふる祝語をとなへる京
大坂ふ　く專らハる事ふ田舍ふもあり
国ふうて今ハ毎家ふて社人来りて稜
をとる所もハる是ハ禁中ふ北日ふ行ハ
る大祓の余風ふべし　厄拂の事哥
にちて　の沸　ハ　ふとハ素盞烏
尊ふ　ふ置所ふ物をほこて拂ふし
ふ其千ふ置所をちてれ沖といふなり
べし。祇園ハ　ふけの夜ふも身の厄ハ
拂ふ人ふ為何ふるものふても我身ふ添ひ
なる物をまもと道ふ落し歸ることのふく

七も同じ心にて人々厄年迎慎む譯なるべし
お厄のとけ委しく　日本歳時記拾遺に出

(俳)性なる強き人なり厄はらひ　貞雖
たまさかや進拂まこと厄拂　恕由

(狂)ぜさとさるとて行くなるまとて
やくくもたくぬやくを拂へよ　駄足

京都 **吉田大祓** 節分の夜ト部家吉田の齋場内陣わく祓を修行る式は正月十九日清祓と同じ。又節分の朝ト部家宗源殿にて神道護摩を修し疫神齋札三千枚を出し諸人受く門戸に貼る

厄塚建 節分の夜吉田神祇宮にて行はる其式庭上に塚を築き祭文をよむ是を厄塚建るといふ正月十九日に此塚を取拂ふといふ正月の條に見るべし

(俳)厄塚も空うなたく拂ふよ　桐宮

京都 **五條天神詣** 勝の餅　白朮賣。節分の日は禁裏へ白朮小餅寶船を上る。節分比夜諸人參詣して右三つの物をうる白朮は家に歸りて燒く白朮を燒く邪氣百鬼を辟るといふ小餅白朮も舊例ふるく是を賣む近世は其料物を社司よりうけて製せしむ。小餅を勝の餅と書くは小と勝と同音なるべし。一說に此餅は社地の內勝軍地藏尊に供る餅なるべし。祭神委敬九月十日記

(俳)ふるのせてもくれ産土勝の風　出戸

寶船 紙に宝舟を畫て節分の夜人の寢る床の下に敷く。或人のいふく寢はいねく我を稲として舟に積て我心うるべし　除夜明方

い人のすどろむはいねつひこいふ同じ

(俳)足拔をしていぬきにこそ宝舟　看月
宝舟のこゝにはたり酒の酔　厚平
枕妻と二人が床やなるらんも　半窗

(狂)たくくふ祓たくはこれでもよくれども
おもこぬ見の祓の神とや　拾苔

節分

大原雑喉寝

○山城国大原江文明神の祠へ詣れば男女参詣通夜して夫婦乃かゝるひとをいとふ○山州名勝志曰昔蛇井出村の大淵といふ池ふ大蛇住む時〳〵里ふ出て人をそこなんとすときへよ蛇出るとて男女一所よりけさうの臥してかつゝ当うるれを大原ざこ移といふこの事よりおこりて其後八節分乃夜産沙神の拝殿に一通夜をるとぞ

(俳)せをそもの鼻て見利のさこねい鬼貫

(狂)よい程のうゝるゝ初をとなもいゝに

ふくうさこ移々大原のゝ　遊糸

月令

此部ふ八十二月一ヶ月の日の定まり事と記れ

煤掃

○もゝくはきふもゝくはらひを歳暮のわと

ぜ一事八百姓八春八たゞやゝ夏くさきう秋収む冬のこ其暇ふ得〳〵一年よつゝる煤をくゝひて春を迎ふいうゝへろゝ社ゝゝハせゝう又内裏の煤とゝしめゝ八陽院の御時とゝ人此事させる公事ふあゝ代畢物語よ出○家ふ煤の凝るこ繁昌とゝ神代巻大巳貴命國讓の文中ふ見ゆ○唐土ふも掃塵とゝ此月ともはゝひをおとゝ見へゝう

(哥)かけらきも外山のともの雪おとゝもはゝふくゝう　経行

(俳)ともゝゝ紀も何を言も捨られれ　支考

ともはきふふうさて仕舞う　仝

(狂)ゝゝよても所中てゆよすゝゝひふゝせの松もかこうかゝまハ樂水

衣配

○源氏玉ぐゝれ巻ふ衣ぐゝの事ふ其文ふ書ゝさゝ

きハ年れゝれゝ人々の装束かゝ縫ん

おとゝ紀ゝゝくゝせゝ

ぐいろろきあをを御覧じていこ多りひ
る物ゑみかゝくふ恨なれやしたくぞうぐき
事として御衣櫨箱ぐもふ入させうひて
それハかきへことぐじて入るこ有にれ
くふ衣をくぐりあへるハ源氏のおもひ人
ひちへのもさせそう民間ハも親属奴婢
などふにうこゆるとさせ處物ゑぐも
ゑきぬくげうろう

(俳)いろくはくはもまあそれことこ園生
衣ゑゑ千司かとまくふそう　大立

(狂)これくふむ配このきぬくはう
一ことにいろきまゑきろう　松花

札納

門戸よはうたる寺社の札
ろうおさゑるひう

古暦

暦の末　巻はつる暦　巻納
暦　右ゑ巻暦

(哥)新六帖　二ゑの暦れるくふをよせ
くのゑる日数のかゑももくふた　知家

(俳)いくしき日も巳の日を古暦　良道
麦のくけ暦のまれ二三す　道風

(狂)暦ハ物ゑ世ゑ大坂のせきれゑ
通ゑゑ世ゑれいこのゑ　貞柳

星佛賣

年初ハ其年の属星を
禁中ゑて祭りゑひ御修法
ある也此月十三日佛師来年属星を曜
の像を造て禁裏へ奉る民間ハも此ゑび

(狂)暦ハ物ゑ世ゑ大ハ月も世ゑ川の
ゑの末ゑハ月も世ゑ　流霞

節季候

嫗等。乞食がらに
裏白をさーえさて

家くふ来く節季はだひくゑ呼
いりて米を乞ふだひくふだひくと
乞食の言ゑるべし昔ハ赤き紬ふ
く頭面ゑつこ烏帽子を着ゑり
こへ。姥等ハ乞食の妻ゑど同ドく
白毛紬ゑの顔をつゑみ赤前ぶれて
自婆等とゑふく米銭を乞ふ此
をのゑ京師ゑのゑ出る

(俳)いの付く芋ゑ
ゑふくまいと切りてまゑう民幸ハ蜂房
馬尉

をこなひ〻来年の属星を祓行て賣翁
○属星とハ九曜星を人の五性に配し
て毎年の属星とする也。九曜とハ
日月木火土金水羅計都合九星也

年木　△年木樵。内裏へ薪を上るハ
御ゑ所木とて早春ことしふるとし
ふつゝかおきてかざり木などゝ稱し其木
をきる者を年木樵といふなり

後九条内大臣

(哥)　夫木
ゑるしゐの社山川のいろこそ
いとくとしの木をはこゝやちとせん

(俳)　花のちく木も樵る老の冬ゆゑ　雪紅

(狂)　花も実もなれをふるくて枝のこを
ゑのとり木といつゝがうなり　祐喜

年取物　正月ふ用ゆるかざり米年
木其外来春用ゆる物を
年内にとり貯るをいふ　詩六

(俳)　九除夜の老織いろふるえ　詩六

年とり市　正月の儀式ふ用ゆる物を
賣る市をいふ　△毬打賣

△ぶり〳〵賣△ちごいる賣△神の折
敷賣△かやうちぐり賣△楪賣△金ご
賣△穂長賣△巣竹うり△餅松賣
△かさり蒙賣△神の皿賣

(哥)　市に如くさきるもゆるこゆ玩の
いをくハはるのいとれうゝん　久定

(狂)　この市ゆきうれはなけるあるゝ
いうてうくのうれ市ハ　子海

餅搗　△餅花△餅むしろ。賃搗
△青むしろ。長寿れ柱餅
○正月祝ふ餅を年内つきて新しき
筵に載れくらう。餅花とハ小さい
餅を柳の枝に数多つけくえるの
かゝり成。賃搗ハ繁華
の市中にハ金臼杵臼など持て人の家
に来り一臼搗賃何かゞ賃を取て
搗をハ三四十年前ゝ
○柱餅とハ肥前の長崎ふてい年の
これの餅搗にハ終にその一臼を柱に養付
置正月十五日東土の火ふて焼こ養ゝ

(俳)勝つこと音たに美よ祭ふ伝 文考
勝つきよ我わられト女のちからふ 来川

(狂)湯気のこ行書の中ゝある深つきよ
つまそもちゝ人ゑもも咲やうり 貞柳

△年忘 年の暮ニ親類朋友互ニ酒宴をなすを云ふ 唐土ニも此事あり名づけ云ふ 發散又ハ別歳 この文ゝ東坡集ニも出たり

(俳)人ゑ教と雲せゝ我ゝ忘 芭蕉
煎好ハ死ねこの人ゝ年忘 文考

(狂)年忘つひちし言の葉伝
思ひ出ゝてゝこゝ人ゝの森 甘露

△寒聲 △寒声つゝ△寒弾○謡端
苛なこ調ふ者寒風ふ向ふゝ修行と○三線など稽古する者 修行と

(俳)寒あ手我つ逃る二三遍 天夢
寒あやゝゝと語ゝ及ふ 及風

△寒垢離 修験者の類寒中に水を浴び身をこらし

て神ニ祈るこれ火伏なゝいひく
家々ニ水を浴させく銭を與る
もはゝ又信心の人を立願して
行ゝゝ浴るもはゝ

(俳)寒ゝやちつと浴せて寝る 徳夫
寒ゝ中ふ被て寒る 麻もる 羅人

△寒念佛 これ寒垢離の身を懲しふ同じく夜々修
行ふ七墓三昧なども巡ること

(俳)あの寒れ撞木ハ細ゝ寒会仏 文考

△臘 △臘日○蜡臘 △嘉平 △清祀
○唐土ニハ四時獣狩あり十二月
の狩を臘といふ臘ハ獵と義そ
獵して獸を捕て先祖を祭又百神
を祭ることへり○冬至の後第三乃
戌日為臘百神を祭る漢の世ハ戌
日を以ゝこと魏ニハ辰日を用四晉ふ
ハ丑日を用ひ説文ニ出今ハ大寒ふ近
き辰日を用ひ○此祭ハ夏の世ニ
ハ嘉平といひ殷の世ニハ清祀と

いく周ハ大蜡とこの人漢ニハ臘とこの人
なり　風俗通の禮傳ニ出ル臘ハ先祖を
祭ル蜡ハ百神を祭ることなりと同日に
して祭異ニ王燭宝典ニ出ル按ずるに社
日の祭れ類ニて社日の祭ハ民の行ふ
所臘ハ上一人より下万民ニ至るまで
先祖をまつりて又諸の神を祭ることに
酒宴をやり　祝ふ事本朝の祭れ
如くもろなるべし
○本朝ハ十二月朔日ハ祝いて喰
ふ餅を川しくり餅とつくり此余風
なるべし　季冬ハ水の終ニて辰
の日ハ土れ位ニ水土を祭るゲ故ハ川
ひろとの事も據あり　風俗考ニ出
○哥ふ冬の狩ニの六是なり古の習俗
ハ皆もろこしを法ぶる事ニもろべし

詩　臘日常年燧尚遥　臘日ハイソ年モ暖気ノ
催スコトハソッタ　今年臘日凍全消
ニナイコトジヤカ
臘日ニハ氷モノ侵凌雪邑還萱草
コラズキエタ

雪ヲシノイデ漏泄春光有柳條　春ゲ
萱艸モハエ
ミキヲチラト見セバ縱酒欲謀良夜
ヤナギノエダシヤ
醉　オモフサニ酒ヲノンデオモシロイ
コヨヒノエビヲタノシマフトオモフ　還家
初散紫宸朝　朝庭カラ家ヘモドツ
クロ腊面藥隨恩澤　面ニツ
イダ　アシンデンノ礼義ヲ
ケンクスリナドヲ拜領
スルミナ君ノオメグミジヤ
九霄　アヲイフエヤシロカネノサヲヅキモ翠管銀罌下
ミナ拜領モノジヤニヨツテソラカラ
アマクダツタモノ
ノヤウニオモフ

詩　五字對句　同上

宴禮非迎氣　獵獸逢良日
今日ノ酒宴ノ礼義モ　獵ハキ日ニ獣ヲタノンデヤ
陽気ヲ迎ルデハナケレト
司神為報功　吹灰屬令辰
冬ヲ司カサドルカミガ功ヲフエキウメウ冬フノモヨ
ミセナサルノジヤ　キ日ニヨツテジヤ

臘日故事

勞農

漢書李冬ノ月農人
百姓ナドヲ子キラヒ

酒サカナ等ヲ賜フテ天享職アリテ天地人ヲ祭ルノ意ナリ

時令

此部ハ十二月一ケ月ノ時候ヲかくことを記ス

寒　一寒ノ入。寒ノ入マヒ食ヘバ寒氣ヲのがるべし

(哥)　肌さゝるおもひふさむく苦しめと
ひとへいもこそかくしうへ　舎人

(俳)　から舩も空也の痩も寒中　芭蕉
寒人色白ハとゝ〜寒のうち　吐雲

(狂)　とぐがとく魔ぶくろ
まつてゝりかへるおまはぢ　宋張来

(詩)　寒夜

寒夜客來茶當酒　客ガ来タレバ茶ヲワカシテ酒カハリニスル
竹爐湯沸火初紅　竹ノフチヲカケタ炉ノ湯ガワキ
寂寞無人共一杯　ケバケモツカイニヲコツタ
窻前月　イツモヲナジヤウナ月ノ一ヘノ月カゲモ
梅花便不同　スコシ梅ガ咲テアレバカノ月カゲガツ子
トチガフテオモシロイ

(詩)　寒五字對句　同上

急景流如箭　童子愁氷硯
短イ日カゲ〜ナガレテ行コト矢ヤウニハヤイ　コドモハスゞリノコホリ

詩題

凄風利似刀　佳人苦膠盃
モノスゴイ風ガキビシウ風ウツクシイ女ハ杯ノイニタツテカデキルヤウナ

(詩)　寒七字對句

苦寒氷合分流水　衣帋裂
サムサヲキラヒアツ〜ヘ分キツ子ノカハヲテ流ル水モ二ツニコホリ合フ　ロモヲキル

欲雪雲垂四面山　紙窻寒
ユキガフリソフデ雲ガ四方ノ山ニオホヒかゝル　カミデハツタヘドガサムイ

寒之故事

肉陣

申王嚴寒ノ時ハ妓女ヲ坐ノ側ニノツメ圓居セシメテ寒ヲフセグ楊家妾ノ肥大ナルモノヲエラビテ行列セシムコレヲ遮風肉陣トイフ開天遺事ニ出タリ

鶴語　晉ノ大康三年冬寒甚シ南州ノ人二ツノ鶴ヲ見ル鶴語ニ曰今年ノ寒気ハ堯帝ノ崩ゼシ年ノ寒ニ劣ラズ晉書ニ出

狀　寒氣見舞文

時維栗冽寒威侵人
未審動止佳勝不佞
庸劣依舊無煩軫念
聊裁寸楮奉候

同　書替之文

天寒氣縮○烈寒凜々○洞陰奇
寒冒骨毛○履冱清福○眠食
清安○鰥生○小子○吾儕○陋生

同

久不聆清誨義可奉問友
賜高教慰問愚老之熒枯
深感至情伏審雅履万福
寒甚自玉是祈

年内立春　△冬の春△年の内に立春○委しくは五九ヤニ記

除日立春　十二月晦日に除日と云ふ俳諧は二月の季なり

家集　行年の春の過ぬる事のうれしさ

連　ふるとしの春や一夜の初かすみ　昌叱

俳　春ゆえに花遅ぐれて蕾　季吟

狂　日にあるも元日なれば常蕣

歳暮　△年仕舞○寄の詞よく季に用ゆるものハ次の條

よ△印をとるべし。十二月廿日頃より
廿日ゆゑを歳暮といふ。歳暮
の賀といひて親類朋友互に物
を送り合ふ。無事の終年と
よろこびくらす。唐土も此事は
宋東坡が詩よも見へたり。年の末
を歳暮又は年の尾などいふ。深き
譯は歳時記拾遺に委しく面白きなり

哥　万葉　三年ふる花は果ても梅
の花ちりはかはらぬ色にぞ
古今　雪ふりて年の暮ぬる時に
こそ春まちかねて鶯ぞなく
後撰　世にふるとなにかはつ
ゆ拾遺　ゆきつもるおのが年をば
しらぬをもとのとしとぞ
金葉　人知れぬ思ひ
ふるはるいとふ花のうら
新勅撰　ふる雪ぞ
つる年のこゆれて

續後撰　人とあ
も年のとしふちぬ
新後撰　我身世
ひまはちつく年も
柏玉　河歳暮
河年はふる川の
ときみし年ふ人
雪玉　家々歳暮
年はなる家
はねの中も年
同　山家歳暮
年ふるとし山
はるるとふる

詞　△年の名残△年の別れ△年の
△年をこそ△年惜△年
△年の海△年の尾△年の
年△ぬる年△年の際△年の
△年の果△年を送△年
△年の夜△年の暮△年
ちづく年△年の流△年

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の矢のごとく。とぶるまのこと月日。

○年の尾年の暮の事くさ〳〵

歳時記拾遺とり本ふ見へくろう

連　[illegible]　行助

[illegible]　宗長

[illegible]　昌林

俳　[illegible]　公

[illegible]　嵐雪

[illegible]　其角

[illegible]　支考

[illegible]　湖春

狂　いふさまれおきち長とそ眉のお

かゝらのるをくるゝ　百甘

十二月ぶゝふるゝ〳〵〳〵の哀

光陰はるゝも山ぶゝのやし　栗彙

月どみなくゝ又正月ぐるゝくと

なくゝきひゝもあ車うる　被根

詩　歳暮　羅鄭

檢曆俄驚臘月逢　カニ臘月ニアフタヤウニオドロク

年光何事太匆々　トレツキガナゼニコノヤウニセハシウタツゾ

農閑暇功初畢　フユハノウニンモヒマデリノレワザガスンダ

萬室收成歳已終　イヘくニモノナリヨオサメテトレノヨハリニナツタ

歷々寒風號古木　一風ガ古木ニヒビク

蕭々晴雪落長松　モノレツカニツモツタユキカタカイヤツカラオチル

何人得似山翁樂　榾拙無烟活火紅　ドコノヒトカオレガヤウニ山ズミノオヤチノホタウチクベテ火コクワツくトオコシテタノシムモノニオヨバフリ

詩　歲暮季對句　同上

看雪何妨醉　傷懷殘臘去
ユキヲミテハナンボエラテモカマワヌ　スコシノコツタ冬ハ尽ルヲオシレフオモフケレド

尋春即有期　屈指早春來
ハルケレキヲタヅネルモッヒ今ノコトジヤ　ユビヲ折テミレバツヒハルガクル

詩　同七字對句　詩楚

歲暮陰陽催短景　冬欲半
トレノクレニハ月モ日モ短イヤウニオモフ　フユモナカバヘキタ

天將霜雪際寒霄　歲又殘
ソラカラレモユキヲクダレノサムイヨウシラセル　トシハスコレノコツテアル

歲暮之狀　白駒過隙忽逼改
月日ハヒヤユツマヤウトクモハヤトシタチハル

歲誰可脫世紛況於足下
コウレノイノチニヤサイヒヌスンテカヲフリシヨウトカオイソカシカラウトウヂヒヲミアハセテオイデク

公私之忙乎幸偷閑責臨
命小酌以遣鬱悶呵々
イジテセウシヤクヲモテヤラン　ウツモヲカヽ

歲暮之狀書替記

歲華荏苒一年將盡。歲華驚換。人皆奔忙

四方況於吾子饗紛擾乎
シハウニイハンヤオイテヲヤ　レノアクニフンニヤ

狂顧舉盃少逐風塵
ケウコセヨアゲハイヲスコシタチフウヂンヲ

草木

此部ハ草木ヲ取ツメタルハ

冬梅
ふゆうめ

梅ハ春の物なれど年の内ろ咲をいそり早梅ハ次わるん

哥　六帖　四つれをつきてどうぞ梅の花枝もとぎすにふれる三ツ寸

拾遺　ふれるとえこそ梅ハ咲ぬるはるよハ我身ハ春ワンとなる事ハ貴之

千載　冬もこの垣ねの梅の咲ぬるハかいうりのそこはるも白ゆめ

連　みさくやいくこころ比梅の花専順

俳　風根ふく結高気三年の梅　文考

早咲梅

△早梅　△寒梅　いづまも早く咲かる梅をいふ

早梅ハ十月前冬至前ニ花開くと梅譜ニ出タリ　△寒梅ハ香ゑ〳〵九月花開くと花譜ニ出　寒梅を十月の季ニ出し〳〵る俳書も多くいづれも俳ハ十月の梅ハ早く咲くとも十二月ニ〳〵可ニ〳〵しかん

哥　柏玉

後柏原院

ちくさくさくもおやふく白たれやおの日ぬ
あ〳〵ふ情〳〵き梅のこゝろの花

連　雪ふのこゝぬせてやうん梅の花　宗祇
梅さけかゝるまあさむかきもるる　肖柏

俳　早咲や梅一ゑ〳〵ふ梅の花　文芳
早梅や市宮の里れ雪の花　蕪村

詩　寒梅　　戎昱

一樹寒梅白玉條　一木ノカンバイガ
こゝタヤウニミゴトナ　迥臨村野傍
溪橋　ホク村ヤ野ニサシカヽリテ根ハソハニレニツテアル
モトハタニガハソハニ

不知近水花先發　水ギハニ近フハナノハヤ
クサイタノ疑是經春雪殊消
ヲシラスニ
春ヲヘテモキヘヌまゝ年ノ
ユキノ残ノタカトオモフ

臘梅

常の梅の花ハあ〳〵ば
花の形狗蠅ニ似たり
故ニ別名狗蠅梅ともいふ　色黄
香甚し　故ニ檀香梅ともいふ
又色によりば淡黄梅ともいふ　本朝ハ後水尾帝の
御宇ニ始く　朝鮮より貢ス
○梅ニ似く梅ニあ〳〵ば　活法小出

詩　臘梅詞

輕盈半度縷金囊　不似西施粉態粧
ガタノハナブキニシテクンタフクノヤ
ウナニヨツテ西施トイフ美人ノケハヒ
タテタヌガタ　爲是來從眞蠟
ヨリハヨイ
國幾人爭蹁小黃香　コノハナ

ハモト真蠟国トイフトホヒクニカラ来タハナジヤニヨリテオホクノヒトガワレイキトシヤウヒシテ小黄香トイフ名ヲウケタ

詩　五字對句

花裏重々葉　不施千点白
ハナノナカニオホクノ葉モミエル　オビタヽシフシロイハナハサカヲドモ

枝頭點々春　別作一家春
エダノサキニチラ〳〵トハルゲシキガミエル　冬ノ末ニワシヒトリノ春ヲミセル

探梅　冬のまゝ梅をたづねはつらくなり

俳　香を探る梅ふ和ふる初霜ふて義

寒竹子　孟宗竹。薩州ふ生ずる竹冬筍生ずふ小さくして味美なり。鳳尾竹とハ云ふ竹ふも冬筍生ずれども細くして喰ふべ〳〵ふ三才図會ふ出ス。冬の筍ふ孟宗と名づくる事ハ唐土呉の国に孟宗といへる者あり〳〵母ふ孝あり

母ふ孝ふ好む也雪の中ふ竹の林ふ行しふ母ふ孝心を感じて冬ふ成ふて筍生ずれども則取て母ふ供ぜとつゆ〳〵ふ出ス。今ハ竹ふ根ふ蓑ふ臣早春ふ筍出

俳　孟宗非欲の孝行ふ成ふ紀　自風

生類

此部ふハ十二月ふ月の生類をいふ

八目鰻取

北国ふ多ふ殊ふ能登の海の厚氷ふて下ふ穴ふ〳〵ふ火を入て其穴ふ氷を破り取なり

妙薬　小児の疳又ハ省目を治ス

春夏ふ〳〵しハ悪ふ寒ふ取ふる八を奇功あり焙て食ふもよし

俳　八目鰻伝授の宝や秋の富　由山

寒鯉取

其輪田鯉取。常州ミのゝ八水の流ふ濁ふて紅ふ近ふ潮ふ通ふ依て魚の味美ふ

俳　鯉ふや駒告ふよるむつの地千林

鶯巣をとる　雞乳もはハ口の三ツ三ツ差

必用

此部ハ十二月下月の要用の事を志るす

破軍向方

夜九ツ卯ノ方	夜八ツ辰ノ方	夜七ツ巳ノ方	
朝六ツ午ノ方	朝五ツ未ノ方	朝四ツ申ノ方	
昼九ツ酉ノ方	昼八ツ戌ノ方	昼七ツ亥ノ方	
暮六ツ子ノ方	夜五ツ丑ノ方	夜四ツ寅ノ方	

日刻　○子ノ日酉百○子ノ刻酉ノ刻　事をとなふ用ゆべし

方角　此月家普請他行西の方ロトリヨシアシ　て吉〻天道西ハ行くゆべし

樂事　此月ハ四時の未ハいまだ得る折なれバ花ハ少し　きわくさうなどうなをくいを　ぎ皆春待心よりなり祝ひ　ねどおかく或そなるのの　庭園ハ梅開くなどと聞くハ

窠ハ瓢簞くりてへ行ハ即　畫中の人ハ似ざり甚雅趣ハ　はうなし夫茶室炉辺の奥尚　閑人の時を得ることとすべし

衣服式

枯色　梅五節より　女紅葉同單

白き上着　櫻

椿衣　面蘓芳　裏赤　五節季より後

ハ用る事も有

脂燭色衣　ぬき紅　たて紫

生華式正

寒梅　水仙　寒菊　寒牡丹　寒百合

天氣占候　此月紫の雲たてバ大風なり赤雲ハ　つざハひあり○戌亥の雲ハ風なり　○此月ハ雨のもち風を生ず東　南のかぜハ久〻吹ども虹あ　きバ人民わづらふ虹さびくなり　きバ大豆のたかい高し米も高し　○霧あきバ来年五穀よし　来年

冷ろ霧多くれバ来年旱ふく稲悪し○上中旬雪ふれバ来年梅雨中雨おゝう○寒中ニ雷なれバ米の價高し又来年秋洪水あるべし

養生

孫真人曰此月ハ甘きを減し苦きを増し心氣補ひ腑をふさけ腎を調理すべし

○寒中に天門冬茯苓細末にし酒又ハ水ニてよく服すべし多く用ゆれバ薄着ニても能く寒を志のぐ

右の外養生の法委く延寿養生論ニ出ゆり大に益あり見るべし

屠蘇方

白朮　桂心各七分　防風一匁

菝葜五分　蜀椒　桔梗各五分

大黄五分　烏頭二分五り　赤小豆十粒

右の薬を三角の紅の袋ニ入除夜ニ井の底ニかけて元日ニ取出し酒ニつけて呑めバゑきれいの其外一切の邪氣をさくる

○時珍曰蘇ハ鬼氣の名也此薬一切の鬼爽を屠割する故ニ名づくとぞ

右の外包ある本式薬方諸医の論悉く丸散手引草ニ委し見るべし

○長生仕様傳授といへる本ハ平かな小本一冊ニして人間長寿を得の法妙薬秘傳をのせ小児誕生よりそだて様産前産後心得并生るゝ子ハ短命なるといへる迄長寿せしむる術其外一生の間養生の事あるをのせ

飲食

此部ニハ人々このみて常食しうる食物をあげむ

△鯛味噌　生鯛の腸骨を去て身ばかり味噌ニ和しよきかげんニ煮爛し泥のごとくし

(俳) 鯛味噌や村ニ隠居翁ん　兒十

△煮凝　何魚ニても油ある魚を煮て一夜越れバ煮汁氷る也

△凝豆腐　△こぶで蒟蒻○氷餅○氷ごうりハ水ニつけ置

(俳) こんにやくやひふ上へておゐりてむすばもとの餅となる　秋光

注　石二の玉を清る日ひれども解
手ぬぐひ　をいそひもちひん　隆峯

寒曝　餅米を製すこと飛ぶ栖
あ代と仕ふ　其の内　其角

寒入餅　寒中に製る餅ハかび
出る事なく味も美し

注　この餅　米とあるもわるくと
乳のもちゆゑてうびぬつき合　ニ〇

寒造酒　俳　酒毒や雑ふるみぬ
造り　白面

注　けてこうるはいはつてうきつくり
これを君まれ酒ゆうゆ有る　松雨

藥喰　鳥獸の肉其外陽物以
食して寒をふせぐ　李右

俳　其ひ盃　合点の和古ひ　野水
寒ひ　教のきしいもをもしれ　李右

鹿賣　此頃専ら鹿の肉を煮く
青之冬此肉を喰へば肉を補
い気をうし血脈を通して大ふ益有
俳　鹿賣や踏ふ子てふ　麥天

十二月飲食　並料理献立

禁物　獐肉○猪肉○霜ふ爛
きうり菜菜と食ふ事な
うき○韮と多く食ふべからず
○牛肉と食への神と破る

好物　羊頭　今月食ふ　他
月々ふい病と生ぞ

料理

汁　たつくげ　俗ぞう
丸むきうど

そうめん　たら
けし　茶せん　茶ぎ
木のこ　ふくりろ　ふくりん

ぐんもやびせうつぶこつけ

まき菜　うぬ
ごもも　かぶらて
かぶらて　ぬとる

清汁　長れし　こせう

がん　さんせんれ松

鴨　生あひ　水せんのう

膾　鯛・赤ゑ　大せう・ぜうが

肴　俱　糸づう
ぬすつくり　ぬすつくげ
ぬにん　まそびず

鮫・ふくげ　坊・たうん・うど
きんえんぐらいど

さより・塩引さけ
えび・うど
ぶり

生あわびちん
くらげ・大こん
若布

差味

生鯛 角切
生うつぼ
おろし生姜

ごへ
煎さけ

ふな 作り身
ひたしかん
くりせうが 木まぜ

きすご・くらげ
ごぼう
いか・あさつき

にし 白ミ 繊切
たんざく大こん
わさび

焼物 さより
つくし
の為し

煮物

きんこ・きう 牛房

鴨
ちくわ
ひぎん

たいてんぷら
ちりごぼう
松茸

むち穴子て切せんば
紅 茄子 青こ

白うお むして
くずあん
わさび

一塩鮭
まのて
せんぞう

生鯛 むして
わさび
そそ

和へ物

生がい 角切
こまぶ

串ろん
うずら
黒あへ

烏賊
かうらい
まあへ

生あわび
木くらげ
青そ

くらげ
ちやうろぎ
梅あへ

くるま えび
やうかうけ

赤にし
小すぎ
青なそ

吸物

かき
せり

生鯔子
うきのり

かしわ
ごぼう さゝがき
せうが

鴨
せり
さんしやう

かき
つまみ 盛
こしやう

精進 汁

むとびかん麩
つぶしぬき
青のり

あげ豆腐
たけのこ
大根

くずし豆腐
きくらげ
せり

焼豆腐
ぎんなん
青のり

はんぺん
葉みそ

さいぐぬ
出しけ
そやきけ

とうふ
けし

清汁

たいらぎ
うしお
わさび

小板ばし
鈴の実
こせう

膾

大こん・赤ねぶけ
ぞう・ちやうろぎ
きんかん

はぜ
あげ豆
うど・くらげ
ぜうろ

差味

大こん 小口切
あげ麩
出しさけ

あげ麩・めぞ
木くらげ・皮
くう・あんかけ

うつまいも
芝栗
ひろうず
こんにやく

むしいも たんぽ
きくらげ
わさび

大根ぬけさん末
こんにやく
たんぽ

三輪そうめん
出しけ・わさび
いり酒

煮物

和會物

時物

鳥

魚

青物

李寄
註解 改正自分傳物筌 三冬部 四